# あ　と　が　き

J.C.ヘボン編訳『和英語林集成』初版の「英和の部」(Index) の訳語索引が、いま完成しようとしている。振り返ってみると、『和英語林集成』を対象とした研究が私 (飛田) の処女論文であった。今から36年前のことである。研究論文目録を作成して、私と菊地君との縁が明らかになり、また研究の継続性がいかに重要かを痛感する。そして、後輩の菊地悟君と出会った幸運によって、私の念願であった索引が共編で出版できることになった。感無量というほかはない。

ヘボンは『和英語林集成』の編集に8年を要した。私が菊地君と索引の構想を練ったのは昭和58年のことであるから、それからでも12年になる。東京と盛岡とを菊地君の執筆した草稿と6校に及ぶ校正刷りが往復した。よくここまで根気よくやったと思うとともに、ヘボンの努力がどんなものであったか、驚嘆するばかりである。完全を目ざして全力をつくしたが、不備な点もあろうかと思う。それでも、本書の利用価値は、きわめて高いものと信じている。　(飛田良文)

昭和56年の3月、当時国立国語研究所にお勤めだった飛田先生が所用で東北大学にお見えになった。当時大学院修士課程に進学が決まっていた私は、その歓迎の夕餉に臨席する機会を得たものの、先生方の高邁なお話にただただ耳を傾けるばかりであった。しかし、帰りしな、私が『和英語林集成』「英和の部」を資料にして卒業論文を執筆した旨、お聞き及びになった飛田先生から、お言葉を掛けていただいた。短い会話の中で、「『英和の部』の索引を作ると面白い」というお言葉が、未だ漠然としていた私の研究計画に方向性を与える示唆として響き、まもなく私は「英和の部」のすべての訳語のカード取りに着手することになった。カードと言うと聞こえはいいが、その実、コストを押さえるために西洋紙を押し切りで裁断した、大きさも不揃いの不体裁なものであった。カードを取っては五十音順に並べ替えていった日々、パソコンでもっとスマートに処理するすべを知った現在では、隔世の感を禁じ得ない。

ともかくカードは取り終えて、修士論文にも利用することができた。それを少しずつルーズリーフに書き連ねて行って、ようやく索引の草稿としての体裁が整った。そして、昭和59年の11月、東北大学附属図書館内で、洋学資料の調査に見えていた飛田先生とお話しする機会に恵まれ、公にするよう強くお勧めいただいたのであった。以後、先生との共同作業で、こうして公刊の運びとなった。喜び、これにまさるものはない。　(菊地　悟)

なお、本書の編集にあたっては、英語の意味確認に、国際基督教大学のGeroge Bedell教授の協力をえ、刊行にあたっては、笠間書院の池田つや子社長と橋本孝編集長のひとかたならぬお世話になった。また、文部省からは、平成7年度科学研究費出版助成金の研究成果公開促進費の交付を受けた。ここに明記して謝意を表する。

平成8年1月25日

飛　田　良　文
菊　地　　悟